



NPO **カタリバ**

認定特定非営利活動法人 カタリバ

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 3-66-3 高円寺コモンズ 2F

Tel: 03-5327-5667 Fax: 020-4665-3239

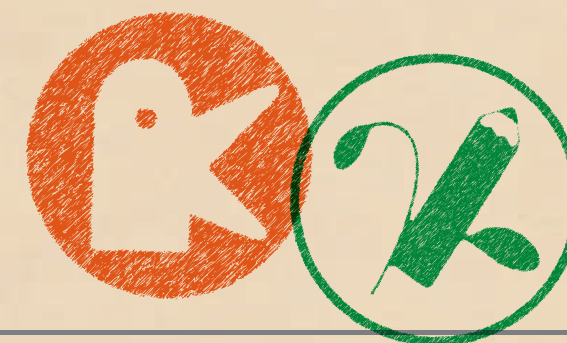
<http://www.katariba.or.jp/>

カタリバは、その運営組織及び事業活動が適正であること等、一定の要件を満たすものとして、東京都から認定 NPO 法人に認定されています。

2015年1月 発行

活動紹介

NOTE BOOK



未来はつくれる

—子どもたちがそう信じられる社会をつくる—

認定特定非営利活動法人カタリバ

いつまでも続く日常に、ただボンヤリと過ごす高校生も、家も友達も、たくさんものを失ってしまった被災地の子どもたちも、あらゆる人は“無限の可能性”を持つと、カタリバは信じています。

「未来は、自分たちの手で創り出せる」

生まれ育った環境や、偶発的な出会いなど、機会の差にかかわらず、あらゆる子ども / 若者が、このことを心から信じて、思い描いた未来を切り開いていけるように。

私たちができるのは、一人ひとりの“主体性”を引き出し、彼らの可能性を開花させることです。

カタリバは、「生き抜く力」をそなえた若者にあふれた社会を目指し、高校生への動機付けを行うキャリア学習プログラム「カタリ場」と、被災地の子どもたちの学習支援と心のケアを行う「コラボ・スクール」の主に2つの活動を行っています。

未来は、 つくれる

目の前の困難な課題と 真摯に向き合ったその先に、 子ども達の救える痛みと、 大きく広げられる 未来の可能性がきっとある

代表理事 今村 久美



2012年冬、岩手県大槌町にて（撮影：三宅祐介）

20歳のさざりとの出会いは5年前の青森県立八戸南高校。普通の大人しい高校1年生だった彼女は、数年後の高円寺で、後輩たちのためにと涙を流しながら新たなカタリ場の現場をつくる未来を想像していたでしょうか。

4年前に岩手県大槌町で出会った優作は、先日進学が決定しました。「もう誰もこんな悲しみを感ぜなくてもいい社会になるように」と、防災学を学ぶために千葉県の大学に進学します。同級生の影に隠れた目立たない中学生だった彼は、震災から2年後、地域でマイプロジェクトを実行する高校生活を過ごすことを、そして、人を守る大人になるという志を持った18歳になる未来を、どれほどまでに想像していたでしょうか。

私たちは、自分たちの果たすべき役割について常に迷い悩みながら仕事をしています。毎日の出来事は、想定していなかった気づきをくれます。学校現場の先生から、行政の方々、保護者の方々、子どもたち…様々な方々との対話は、時に希望や生きがい、時には失望からの気づきを、与えてくれます。そこからまた、悩み、思考し、対話して、自分たちの仕事の輪郭に変化をもたらします。

14年前に大学生だった私は、今のカタリバの輪郭を想像していませんでした。そして5年後、10年後には、今描いているものとはまた違う未来があるかもしれません。

2人からはじまったカタリバは、当時想定していたよりも大きな組織に成長しました。たくさん仲間たちと共に、たくさん子どもたちのための仕事ができることを誇らしく思います。しかし、関わる業務が多様化した分、ぶち当たる壁も大きくなり、悩みも尽きない毎日です。驕らず、企画書に書いた未来に縛られず、毎日ぶつかる目の前の課題と真摯に向き合いながら、仕事をしていきます。自らの変化の積み重ねの先に、一人ひとりの子どもたちの救える痛みと、大きく広げられる未来の可能性が、きっとあるのではないかと思います。

私たちは、これからも全国でたくさんの方々に参画してもらいながら、子どもたちに“きっかけ”を届け、主体性を育む活動を行ってまいります。今後とも、ご支援・ご参画のほど、どうぞよろしくお願いします。

NPO **カタリバ**
認定NPO法人カタリバ

INDEX

- | | | |
|------------|------------------|-------------|
| 2 はじめに | 12 東北復興事業 | 21 マイプロジェクト |
| 4 カタリ場事業 | 14 コラボ・スクールとは | 22 理念 |
| 6 カタリ場とは？ | 16 女川向学館 | 24 支える人々 |
| 8 ボランティア紹介 | 17 大槌臨学舎 | 26 評価 |
| 9 学校からの評価 | 18 運営の続行 | 27 団体概要 |
| 10 全国への展開 | 19 キャリア・プロジェクト学習 | |
| 11 様々なカタリ場 | 20 b-lab | |

#



キャリア学習プログラム「カタリ場」

「カタリ場」の授業は、主に高校生の進路意欲を高めるために行われる「動機付けキャリア学習プログラム」です。授業を担うのは大学生や社会人等の「キャスト」と呼ばれるボランティア・スタッフ。2014年度は、221校、41,785人の生徒たちに、将来を考えるきっかけを届けてきました。

※各地域の連携拠点が主体となつての実施も含めての数値

「自分はダメな人間だと思う」65.8%

「自分に人並みの能力はない」46.7%、「自分が参加しても社会は変わらない」68.3%(※)。明日を担う高校生の現状は、このような“自己肯定感”の低さによって特徴づけられます。ニートやフリーター、引きこもり、格差の拡大、機会の不均等…若者の「仕事」や「教育」をめぐる問題は、どうすれば解決できるでしょう？ 私たちが出した答えは、高校でのキャリア学習の機会を創ることです。

※「中学生・高校生の生活と意識」財団法人日本青少年研究所 2009年2月より

主体的に将来を考える“きっかけ”さえあれば

ほとんどの高校生には、大学生や社会人と接する環境も、将来についてリアリティをもって考える機会もありません。大人になる直前、約98%が入学する高校で、もし「こんな大人になりたい」という憧れや、目標へと背中を押してくれるきっかけさえあれば、もっと自分に自信を持ち、主体的な生き方を、そして意思ある進路選びをできる生徒も増えるはず。そんな思いから始まったのが、「カタリ場」の授業です。

授業の流れ

1. 座談会（自分を理解する）

キャストが生徒に「興味のある分野」や「進路についての悩み」など質問していくことで、生徒が好きなこと、嫌いなことを言語化するとともに、未来の夢や漠然とした不安などを引き出していきます。生徒の自己理解を促します。



2. 先輩の話（ロールモデルを見つける）

キャストの紙芝居形式のプレゼンテーションを聞きます。大学生活で今打ち込んでいることや夢、進路選びの失敗談など、内容はさまざま。「なりたい自分像」の具体例を見つけます。



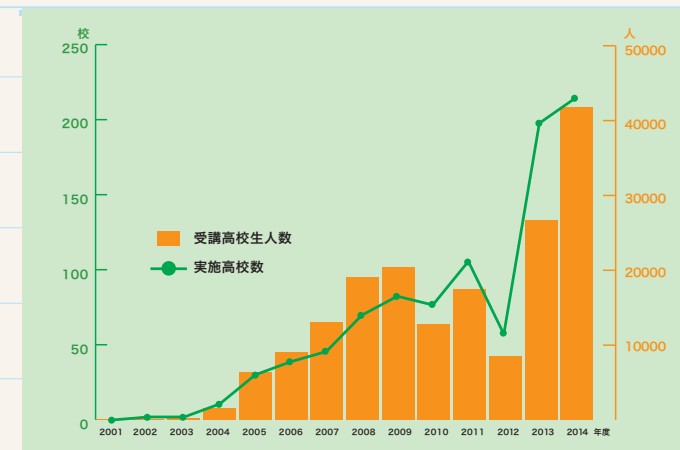
3. 約束（目標を設定する）

これまで見つけた憧れや、見えてきた自分の興味関心などを行動につなげるために、今日からできる小さな行動をカードに書き込みます。キャストと「約束」をすることで、授業の興奮を日常生活につなげます。



18万人の生徒の“背中”を押してきました

2001年の設立から14年間で、1,000校を訪問してきました。累計で約18万人の生徒に、授業を届けてきました。



「普通の高校生」の1歩を応援

全国にいる高校生は、約320万人。そのなかで私たちがフォーカスするのは、8割の“普通”の高校生です。日本が、上位層だけが頑張る「二極化社会」にならないために。「1人の100歩より、100人の1歩を！」を合言葉に、すべての高校生にカタリ場を届けることを目指しています。

85.6%が「高校生活の過ごし方を変えようと思う」

授業の前後で生徒にアンケートをとり、意識変化を測定しました。生徒の「心に火を灯した」ことが数字でも現れています。



「自分は価値のある人間だと思う」と答えた生徒の割合が授業前後で13.3%増加（公立O高校）「高校生活の過ごし方を変えようと思いませんか？」という質問に、85.6%が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答（都立S高校）「カタリ場で結んだ約束（行動目標）を実行したいと思いますか？」という質問に、98.3%が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答（公立N高校）



心に小さな
勇気が生まれた
県立高校3年生
武藤 汐梨

カタリバに会ったのは、高校2年の春でした。もともと私は、手を挙げることも、誰かに話しかけることも、怖がってしまう臆病な性格でした。しかも高校に入ってから、膝の手術のせいで学校を休みがちになり、勉強にもついていけず、挫折感に苦しんでいました。そんなとき、高校に来てくれたカタリ場の先輩が「自分を変えたいならば、がんばってみよう」という言葉をかけてくれました。その言葉で心に小さな勇気のようなものが生まれ、少しずつ私は変わっていきました。自信はなくても、怖くても、まずはじめの一步を踏み出してみるきっかけをくれたのが、カタリバでした。



一步踏み出して、
新たな夢が広がった
私立高校1年生
辰元 凛

カタリ場を受ける前の私は、勉強が苦手で部活のダンスもうまなくて、無気力になっていました。「勉強しなさい」と母に言われても（なんでしなきゃいけないの？）と心の中で反抗していました。カタリ場に会ったのはそんな時でした。先輩は今の私を認めてくれただけでなく、具体的なアドバイスをくれました。“まずは一週間だけ部活も勉強も頑張ってみる”という約束は今でも継続しています。先生にも「変わったね」と言われるようになりました。以前の私なら「勉強はできないから」とあきらめていましたが、一步踏み出して頑張って勉強をしたことによって、新たな夢が広がっています。もっと英語を頑張って、将来は海外とつながることがしたいと思っています。



対話から生まれる創発を信じて
堀井 勇太 カタリ場事業部 ディレクター

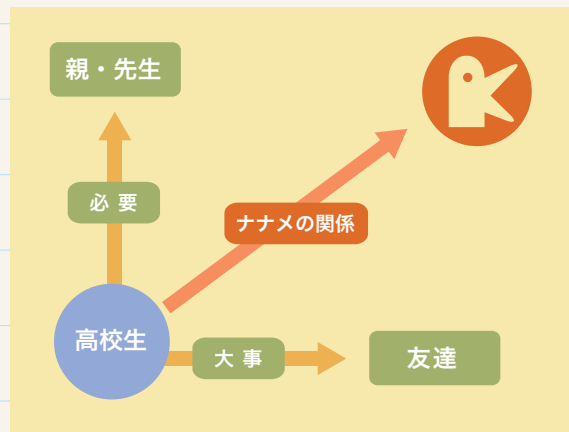
僕らがつくる対話の場。そこに在るのは、お互いが本音で語り合うことで起こる価値観の交錯です。不格好で、決して洗練されてはいないけれど体温が存在する、生きたコミュニケーションです。答えを出す事を目的とするのではなく共に悩み、それぞれの考えや意味づけをお互いが理解していく先に、きっと新たなきっかけが生まれていくのだと思います。様々な地域で、様々なプログラムが行われていくこの先も、決して揺るがないものがこの「場づくり」ではないでしょうか。その対話の場から生まれるきっかけの先に皆さんは何を想像しますか？もし、そのイメージがワクワクするモノであればぜひ僕らと一緒にきっかけを届けに行きませんか？

授業をつくるのは、ボランティア・スタッフ

カタリ場の授業は、「キャスト」と呼ばれるボランティア・スタッフが中心となって運営しています。授業に参加したキャストは、大学生を中心として専門学校生や若手社会人など含め合計で6,662人(2014年度)。目の前の生徒に真剣に向き合って、「高校生のために、自分は何ができるか？」を考え行動する彼らの情熱に支えられています。

先輩が動機づける、“ナナメの関係”

高校生たちに本音を語ってもらうために、鍵になるのが「ナナメの関係」です。利害関係のある親でも先生でもない、同じ視点になりがちな友達でもない、少し年上の「先輩」に憧れ、刺激を受けることで、彼らを動機付けているのです。



授業終了後には、「カタリバ・カフェ」と呼ばれる Web 上の掲示板で、生徒はキャストと交流を続けられます。「先輩との約束、実行しました！」「カタリ場は、私の進路にとって大きな一歩となりました！」など嬉しい書き込みが日々寄せられています。

高校生の心に、火をつけるために

「高校生のときにもっと進路を考えておきたかった」「将来教員を目指している」カタリバには、さまざまな動機をもった方が参加します。東京・高円寺にある事務所では、初めての方向けの説明会を毎週のように開催。2～3回程度の研修会・打合せを経て、授業に参加していきます。



高校に出向くまで、最低6時間の研修に参加

大学生にとってのキャリア学習効果も

授業に参加することは、キャスト自身にとっても自分を振り返るきっかけとなります。「生徒さんからの憧れに恥じないで私でいたい」「自分の言葉に追いつこう」など、苦しいときも前向きに進んでいくためのエネルギーをもらっているキャストもいます。

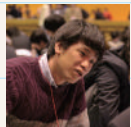


授業終了後、キャスト全員での集合写真

カタリ場から“きっかけ”をもらったので、次は自分が届ける立場になりたい

東洋大学 国際地域学部3年
久保 知可子

「きちんと話を聞いてくれて嬉しかった。ありがとう」言葉少なに自らを語る女子生徒が、授業の最後に言った言葉が今でも胸に残っています。話を聞いてあげることしかできないけど、少しでも役にたてたのなら……。カタリ場に何度か参加するにつれて、相手に影響を与えることと自分の行動によって周りの人が喜ぶことが嬉しいのだと気が付きました。今までカタリ場を通して多くのきっかけを与えてもらったので、次は自分がきっかけを届ける立場になりたい！という想いから、現在はキャスト説明会の運営を担当しています。説明会に参加した人には、何かしら“気付き”を持って帰ってほしい。カタリバに参加したいというモチベーションは勿論、自分の生活も頑張ろうと思える人を増やしたいと思っています。



高校生に自分と同じ思いを抱いてほしくない
立教大学 経済学部4年
玉野井 大樹

僕は学生職員として企画もつくけど、現場に行って生徒と話をするのが一番好きです。先日話した男子高生は、最初は反抗的だったけどこちらが自己開示をすることで、「大人に対しての見方が変わった」と心を開いてくれました。最終的に心に火を灯すには、ロジックだけではなく感情が大事です。どれだけ情熱的に生徒と向き合うことができるか。生徒の意欲を引き出す発言と、感情面に寄り添うことを常に意識して現場に参加しています。僕自身は、大学に通ってから学部のミスマッチに気が付きました。大学生の時に何をしたいか気付くのは、実は遅いのではないかと思います。高校生に自分と同じ思いを抱いてほしくない。それが僕のカタリバで走るモチベーションになっています。カタリ場を受け、大切なことや将来のことを考えることによって、進路の軸ができる生徒が増えていくことを、望んでいます。

学校現場から、授業への評価

高校では、カタリ場は主に「進路」や「総合的学習」の授業の一環として導入いただいています。先生方からは、「生徒の進路意欲が高まった」「自ら将来を話し始めるようになった」など、評価いただいています。

年間計画のなかでの活用

授業は、生徒の特色や実施学年・時期、年間計画のなかでの位置づけなどに合わせて、オーダーメイドでつくりあげています。

■活用例1. 文理選択 / 科目選択の手助けとして

「数学が苦手だから」「社会の点数が悪いから」といった目先の価値観にとらわれず、先輩との対話を通して未来のための文理選択 / 科目選択を考えます。

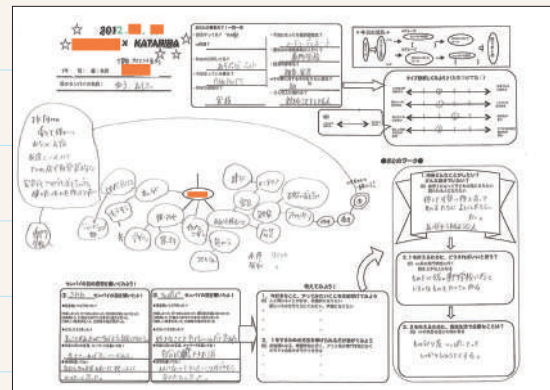
- ・実施高校：東京都立 A 高校
- ・実施時期・授業：1年生の2学期（文理 / 科目選択決定前）
- ・「産業社会と人間」の授業
- ・能力目標の主眼：自己理解能力

■活用例2. 夏休みの目標設定として

夏休みは将来の自分を探るための貴重な機会です。1ヶ月のできるチャレンジを、カタリ場で目標設定します。

- ・実施高校：東京都立 B 高校
- ・実施時期・授業：1年生の夏休み前・「奉仕」の授業
- ・能力目標の主眼：計画実行能力、自己理解能力

授業で使っているワークシートの例



「ナナメの関係」でしか得られない体験は、大きな一歩に繋がる

松戸市立松戸高等学校
椿 仁三千先生

体育館でカタリ場を初めて受けた時、十分に研修され、熱い思いを語るスタッフやキャストの皆さんに、今までに経験したことのないものを感じました。生徒達が、年齢の近い先輩や手の届く目標に出会うことは、とても意味があります。先輩の話を聞き、友人の話を聞き、自分を語る。それにより、実は皆が自分と同じような悩みを抱えており、同じような壁を乗り越えて前に進んでいることに気がきます。それは生徒たちの大きな一歩に繋がります。これこそが「ナナメの関係」でしか得られない体験なのかもしれません。授業の終了後にいつかの笑顔で体育館を後にする生徒たちを見ると、胸の中に熱い物がこみ上げて来ます。いつもカタリ場は、進路は山の頂きを目指すばかりでなく、広がって行く物である事を気づかせてくれます。多様化する教育現場は今までの指導だけでは行き届かないことがたくさん存在します。これからは学校現場だけでなく、企業、地域、NPOなど様々な分野で子どもたちの教育を支えていただく必要があるのです。カタリバの皆さんには、これからも現場に新鮮な風を吹かせていただきたいと思います。

導入事例とアンケートでの効果検証

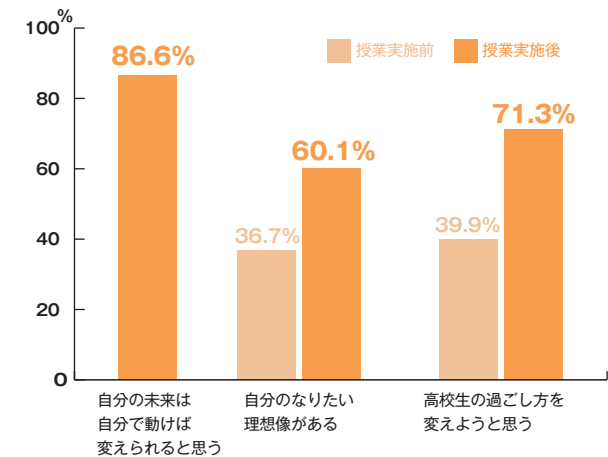
カタリ場のプログラムは、対話によるコミュニケーションという形の新しいものが主役だからこそ、授業の前後に生徒にアンケートに答えてもらい、意識や行動の変化を定量的に測定しています。

アンケート事例：東京都立大崎高校

大崎高校では夏休み前の6月、高校2年生に対して、これからの進路選択に向けて残りの高校生活の過ごし方を考える場として、カタリ場を実施しました。

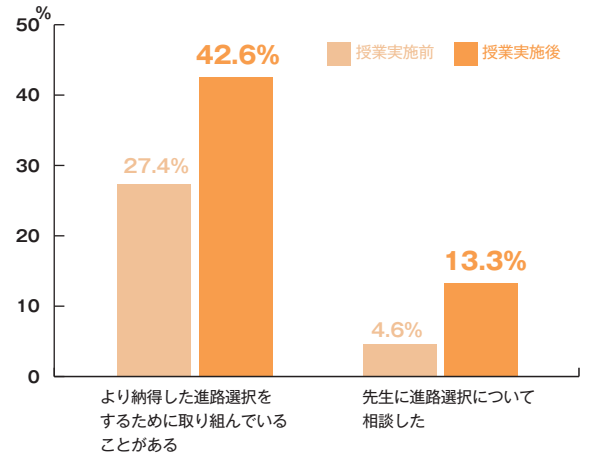
■効果1：進路選択に向けた意識の変化

「自分の未来は自分で動けば変えられると思う」授業実施後、86.6%の生徒が「はい」と回答
「自分のなりた理想像がある」と答えた生徒が23.4%増加
「高校生活の過ごし方を変えようと思う」と答えた生徒が31.4%増加



■効果2：進路選択に向けた行動の変化

「より納得した進路選択をするために取り組んでいることがある」と答えた生徒が15.2%増加
「先生に進路選択について相談した」と答えた生徒が8.7%増加



全国に広がる、カタリ場

首都圏を中心に NPO カタリバが行っていたカタリ場の授業は、行政機関や教育関係者を中心に広がり、「自分たちもカタリ場を行いたい」という声を全国各地からいただきました。それらの要望に応じて、NPO カタリバは研修や人材派遣、ツール提供などを通じてノウハウを移転。各地域の地元 NPO や学生団体などが中心になってカタリ場を行っています。

連携パートナー拠点

カタリバ北海道
宮城カタリバ / 山形カタリバ
カタリバいばらき
カタリバ信州
関西カタリバ
カタリバ in 宇和島
福岡カタリバ

NPO カタリバ

東京（東京事務所・b-lab）
岩手
宮城
沖縄*

※2014年10月1日より、学生団体「NPO カタリバ」としての活動を認定 NPO 法人カタリバに引き継ぎました。

立ち上げ支援

高大連携キャリアサポート
推進事業（青森）



実施都道府県

北海道・青森・岩手・宮城・新潟・長野・群馬・栃木・茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川・静岡・岐阜・愛知・滋賀・京都・奈良・大阪・兵庫・和歌山・島根・山口・香川・愛媛・徳島・福岡・大分・熊本・鹿児島・沖縄

カタリ場が、さまざまなプログラムに展開

高校の授業でのカタリ場から派生して、高校 2、3 年生向けの新しいプログラムや学校外でのプログラムなども生まれています。また、大学の初年次教育や入試広報などにカタリ場を活用いただく事例もあります。

進路選択にフォーカスした出張授業

キャリアリテラシー・プログラム

キャリアリテラシー・プログラムは、高校 2、3 年生を対象に、進路選択についての理解・促進を促すプログラムです。授業を行うのは、「カタリ場」同様、学生を中心としたボランティア・スタッフです。彼らの進路選択経験を生徒と共有することで、意識の向上を目指します。



生徒の任意で参加する校外学習プログラム

カタリバラボ / カタリバ大学 / カタリバコレクション

「学校ではできないような、いろんなことに挑戦したい!」
「教室でも塾でも出会えない、最先端で活躍するオトナの話を知りたい」
このような意識の高い高校生の声にこたえて、学校外でイベントを行っています。週末や放課後に、企業を訪問して職場見学や、社員と語り合うワークショップなどを企画しています。



主体的に 4 年間過ごす大学生を育てるための 大学出張授業

大学向け連携プログラム

主体的に行動する大学生を育てるために、「入学前教育」「初年次教育」「キャリア教育」「入試広報」の 4 つのステージで、ナナメの関係を活用したプログラムを開発・提供しています。



大学・専門学校生のボランティア参加研修

キャスト・ラーニング

カタリ場は高校生にきっかけを届けるだけでなく、ボランティアで関わる「キャスト」にとっても成長機会に溢れています。誰かのために本気になる、「キャスト」になる機会を大学・専門学校を通して提供し、学生の成長を促進します。



津波で学ぶ場を失った、 子どもたちのための放課後学校



東北復興事業

「さようなら 今も聞こえる 君の声」「女川の 復興とともに 石碑立つ」これらは、宮城県女川町の中学生が震災から2年半後に詠んだ句です。2011年3月11日、東日本大震災。たくさん子どもたちが家を流され、家族や友達を失い、勉強のための道具や場所をなくしました。子ども達はそれぞれに歩みを進めていますが、震災から3年半が経過した今でも、安心して学ぶ場を失った子どもたちが被災地には残されています。「教育の機会に恵まれず、未来を思い描けなかった」こうした悔しさは抱いてほしくないと支援に立ち上がったのがコラボ・スクールです。





被災地の放課後学校「コラボ・スクール」

コラボ・スクールは、被災地の子どもたちのための放課後学校です。宮城県女川町、岩手県大槌町で、小中高校生に学習指導と心のケアを行っています。

勉強する場所を奪われた、子どもたち

物資が行き届き、家を流されたご家庭の多くが仮設住宅で暮らす中でも、教育環境は十分に回復してません。狭い仮設住宅の隅、1mの隙間で机に向かう生徒や、家族が見ているテレビの音で勉強に集中できない生徒もいます。



勉強する場所がないためグラウンドで宿題をする児童（2011年6月 宮城県女川町）

子どもたちの心のケアは「長期戦」

大きな災害の後には、子どもたちは精神的に傷ついたり、メンタル・ケアが必要になったりします。コラボ・スクールでも、落ち着きがなくなったり体調不良の生徒が増えたことがありました。阪神・淡路大震災の後には、心の健康について教育的配慮を必要とする児童生徒数の割合がはっきりと減少に転じるまでは、5年間かかったそうです。

生徒による、寄付者の方へのメッセージより抜粋
女川向学館 小6・男子

今の現状は、仮設住宅で暮らしている人が多いです。前の日常生活に戻つつありますが、心の中ではすごく悲しんでいる人が多いです。

落ち着いて勉強する場を提供

放課後に通う小中高生に学習指導をしています。集団授業や個別指導などのほか、自習室も開放。落ち着いて勉強する場所がない子どもたちに、集中して勉強する環境を提供しています。



大槌臨学舎の授業風景

子どもたちの「居場所」にも

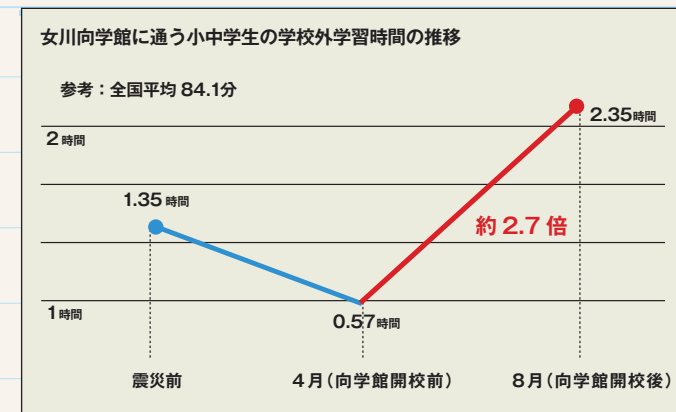
コラボ・スクールのスタッフは、子どもたちの様子がおかしいときは声をかけたり、悩みの相談相手となったりします。少し年上の先輩との「ナナメの関係」にもとづく対話が、子どもたちにとって将来を考えるきっかけとなった例も多あります。



子どもたちとの対話の時間

生徒の学習時間が、2.7倍にアップ

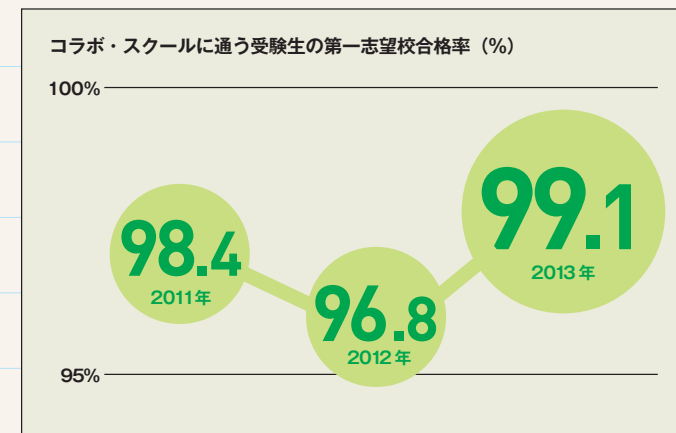
2011年度に行った、女川向学館に通う生徒たちへのアンケートでは、勉強時間が震災直後と比べて約2.7倍にアップ。



大槌臨学舎でも、震災後の8月と比べて設立後には、1週間後の勉強時間が約9時間増加（約2.8倍）しました。

中3生の99%が、第一志望校に合格

2013年度は女川と大槌合わせての第一志望校合格率が99%と過去最大になりました。



震災の体験を、「悲しみ」から「強さ」へ変える

「緊急支援」の役割を終えつつあるなか、注力するのは、子どもたちを「復興の担い手」として育てていくことです。「町の復興のために何かしたい!」と想いを抱き始めた子どもたちが一歩を踏み出す支援をするためのプロジェクト型学習も取り入れています。



地方に生まれたことを「チャンス」に捉える機会を作る

菅野 祐太 東北復興事業部 ディレクター

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。多くの人が、「現実起こっているのだろうか」と疑いたくなるぐらいの光景をテレビでご覧になったと思います。私もその一人でした。コラボ・スクールに通って来る全ての生徒は、そんな現実に向き合ってきた生徒たちです。震災はまた地方における学ぶ機会の格差や、進路選択における「憧れ」や「情報」の少なさなど、様々な課題を浮き彫りにしました。私たちは被災地から、全国の様々な場所から志を持って集まるスタッフとともに、地方という場所に生まれたことを「チャンス」と捉える、そんな機会を一緒に作っていききたいと思います。

地域全体で、子どもたちを支える

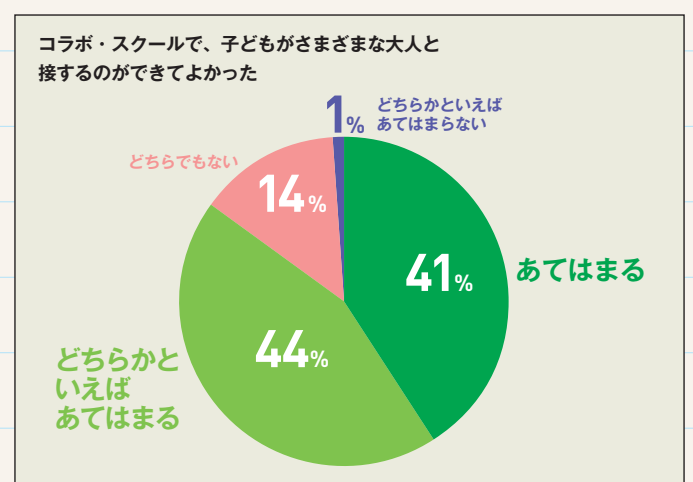
コラボ・スクールが大切にしたのは、さまざまな立場の方々とのコラボレーションです。町役場や教育委員会、学校などとも協働し、地元の方々も雇用しています。保護者の方も、受験生の食事作りなどで運営に参加。ボランティアや、遠くから見守る寄付者の皆様とも力を合わせて、それぞれが組織や役割を超えて、協力しながら子どもたちの学習環境を創り上げました。



地域PRでの打ち合わせ風景

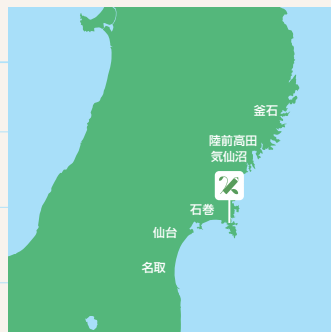
「さまざまな大人と接する機会が良かった」保護者も実感

半数以上の保護者の方に、「コラボ・スクールに通うことで子どもの学力が向上した」と実感いただいています。さらに全国から様々な大人たちが身近な先輩として接しており、このような機会も子どもたちにとって有益であると、評価をいただいています。



女川向学館

ONAGAWA KOUGAKUKAN



コラボ・スクールの1校目「女川向学館」のある、宮城県女川（おながわ）町は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けた町です。住居倒壊率は82.6%と被災地で最も高く、町立第二小学校の児童の9割、第一小では4割が津波で自宅を消失しました。仮設住宅などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちのために、女川向学館では、避難所として使われていた小学校を借り、主に小中学生に学習指導と心のケアを行っています。

設立 2011年7月4日準備開校（8月4日本開校）
場所 女川第一小学校校舎1階
 （宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字門前4）
開校日 月～金曜（土日曜・祝日は休校）
生徒数 122名 ※2014年8月末時点
対象 小学1年生～中学3年生（一部高校生）
後援 女川町教育委員会、女川の教育を考える会
学費 3,000円～5,000円/月（奨学金制度も用意）

大槌臨学舎

OTSUCHI RINGAKUSHYA



コラボ・スクールの2校目「大槌臨学舎」のある岩手県大槌町は、東日本大震災による津波と火災で大きな被害を受けた、三陸沿岸の町です。全人口15,944人のうち死者・行方不明者は合わせて1,284人。住居倒壊率は64.6%と被災地で3番目に高く、町庁舎も津波で崩壊しました。仮設住宅などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちのために、皆様からのご寄付で設立。現在、小中高生に学習指導と心のケアを行っています。

設立 2011年12月13日準備開校（12年1月23日本開校）
場所 岩手県上閉伊郡大槌町21地割字高清水84番地5
開校日 月～土曜（日曜・祝日は休校）
生徒数 132名 ※2014年8月末時点
対象 中学1年生～高校3年生
後援 大槌町教育委員会、岩手県教育委員会
学費 中学生3,000～7,000円/月（奨学金制度も用意）
 高校生（Skype英会話）3,000円/月



教育委員会

「強固な協働体制を」

村上 善司

女川町教育委員会 教育長

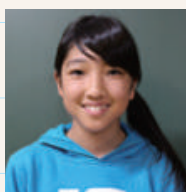


スタッフ

未来を切り拓く子ども達を
応援し続けたい

遠藤 博子

女川向学館 運営・教務サポート



生徒

英語を勉強して
キャビンアテンダント
になりたい

高橋 小紅

女川小学校5年

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた女川町に、女川向学館が開校して3年半が経過しました。子どもたちの学習支援や心のケア等に、全身全霊を傾け取り組んでいただいた女川向学館職員の皆様に、心から感謝と敬意を表します。女川町の復興は、ここにきて加速度的に進んでおります。町づくりは人づくり・・・明日の女川を担う子どもたちの育成は、町づくりの核となるものです。女川向学館とは、これまでの「連携」レベルから「協働」レベルに入ってきています。女川向学館との協働体制をより強固なものにしまして、本町の目指す子どもたちの姿「志をもって 未来を切り拓いていく 子どもたち」の育成に、日々尽力してまいりたいと思います。

夫婦共に職も住む場所も失い、どんな場所でも働ければいいと思っていた矢先、震災前に町内で塾関係のスタッフをしていた私へ、「学習支援」の依頼がかかりました。主人の職が決まらない中、女川から離れたくないという我が子の強い意志。仮設住宅への大選。カタリバからのお誘い。それぞれがほぼ同時期に重なり、「女川に住み続けよう」というきっかけになりました。2015年3月のJR女川駅新設に合わせるかのように町全体が整備され、学ぶ場所も働く場所も、整いつつあります。しかし、震災直後とはまた違った新たな課題が、ここ女川には潜んでいます。「いま、求められているもの」を常に意識し、学校や教育委員会と力を合わせ、未来を切り拓く子ども達を応援し続けていきたいと思っています。

東日本大震災は、私が小学校一年生のときに、この女川町をおそいました。その時私たちは、勉強する場所がなくなってしまいました。しかし、私が小学校2年生の時、女川向学館ができました。私は震災後、十分に勉強できるような場所が学校以外でありなく、ぜひ通いたいと思い、女川向学館に通い始めました。私が今一番がんばっていることは、英語の勉強です。英語はしょうらい仕事をする時や、海外に行ったときに役に立つからです。そして、私のしょうらいの夢は、海外へ行く飛行機に乗る、キャビンアテンダントになることです。そのために私はこれからも、女川向学館で勉強にはげんでいきたいと思っています。最後に、私たちへたくさんの寄付をして下さった方々、本当にありがとうございました。

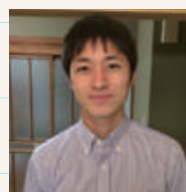


教育委員会

「学べること」に
心からの感謝を

伊藤 正治

大槌町教育委員会 教育長



スタッフ

臨学舎での経験が、
行動の源に

長谷川 真

大槌臨学舎 インターン



生徒

コラボ・スクールは
とても大きな存在

藤原 里緒菜

大槌中学校3年

震災から3年と7か月が過ぎた。町の子どもたちは元気に暮らしており、町内のどの小中学校にも明るい笑顔があふれている。これまでご支援いただいた方々に、心からこの笑顔と感謝の気持ちを伝えたい。しかし課題はまだ多く、子どもたちの活動場所の保障もその一つである。特に中学生にとって勉強のできるスペースの確保は大きな課題であり、受験を控えた3年生に至っては、なおさらである。（中学生の仮設住宅入居率はH26年6月現在で35%）そんな状況の中、大槌臨学舎の学習への支援はありがたい、子どもたちの夢と可能性が広がる「学べる」場所となっている。今後、小学生の学びの場の保障への取り組みが進む中、大槌臨学舎の協力は欠かせない。これまでの協力への感謝と一層の協働を期待したい。

2013年度、大槌臨学舎で半年間活動をし、現在は三重県で中学校教師をしています。臨学舎では、中学生に学習指導をしました。将来への不安を抱き、学習に向き合えない生徒が多く、指導経験が浅い私には多くの悩みがありました。そこで私を支えてくれたのは、情熱溢れる臨学舎のスタッフでした。お互いの成長に関わり合うのが大槌臨学舎。臨学舎を通じて、子どもの将来を軸に考えることや、職場がチームとなり動くことを学び、その2つが今の私の行動の源になっています。また、学校と臨学舎のような他の教育機関や行政、地域が協力することで、子どもの学習環境が整備されることを身をもって知りました。現在は学校という立場ではありませんが、大槌町のように地域と学校が協力できる体制をつくっていききたいと考えています。

私がコラボ・スクールに通おうと思ったきっかけは、中学2年生のときあまり成績が良くなかったためです。コラボ・スクールに通ってから2年。確実に成績が上がってきていると感じています。また、コラボ・スクールの先生方は、教えるということだけでなく色々なことを話してくれたり、相談にのってくれる、私にとって大きな存在です。進路の相談などにのってもらっているお陰で、早い段階から進路のことについて深く考えることができました。私にとってコラボ・スクールはとても大きな存在です。これから受験もあるので、たくさんコラボ・スクールを利用し、勉強面と共に心の面でも成長していけたいと思っています。

寄付者や行政・学校、地域の方々など、みんなで支える

コラボ・スクールは様々な方と連携して、子どもたちに学びの場を提供しています。震災から 4 年目を迎えた今、ご支援をしてくださる多くの皆様のおかげで、夢に向かってたくましい歩みを始めた子どもたちが生まれてきています。

みんなの寄付で開校

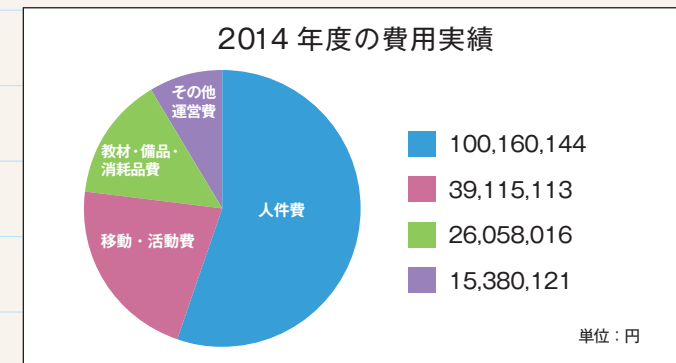
コラボ・スクールの運営費用は、国内外の企業・財団・個人の皆様からいただいたご寄付を中心に賄わせていただけてきました。（ご支援企業・財団様は、別紙をご覧ください）ご寄付は、スタッフの雇用や送迎バスの運行、教材などに充てさせていただいています。



皆様のご寄付で建設した大槌臨学舎

5年間、スクールを続けるために

コラボ・スクールの運営には、年間 6,500 万円 / 1 校の費用がかかります。設立当初は、3 年間で終了（地域主体の運営への移行）を考えていましたが、教育関係者・保護者・生徒からの強い要望を受けて、設立 5 年目の卒業生を送り出すまでは、継続して運営することを決めました。2011 - 2014 年度は文部科学省による「緊急スクールカウンセラー等派遣事業」にも採択。寄付・行政予算・受益者負担をバランスさせた運営を目指しています。



コラボ・スクールの開校や運営にご協力いただいた皆様

女川向学館

女川町役場	(株) 岡清
女川町教育委員会	(有) マルキチ阿部商店
女川町立小中学校の先生方	復興食堂さんさん亭
(株) 丸ほ 保原商店	(有) 針の浜屋
女川町商工会	ステイイン 鈴家
女川町観光協会	復幸まちづくり女川合同会社
きぼうのかね商店街	女川みらい創造 (株)
おながわコンテナ村商店街	特定非営利活動法人アスヘノキボウ
南三陸観光バス (株)	鈴幸漁業 (株)
(株) 高政	(株) オーテック
ワイケイ水産 (株)	日和キッチン

大槌臨学舎

大槌町役場	岩間建設
大槌町教育委員会	安渡地区住民の皆様
大槌町立小中学校の先生方	有限会社 城山観光
岩手県教育委員会	株式会社 大安
岩手県立大槌高等学校の先生方	岩間商店
岩手大学	
大槌町協議議員 東梅守様	
上町ふれあいセンター (小林一成様)	
大念寺 (大萱生修一様、都様)	
小鎚神社 (松橋知之様)	
吉祥寺 (高橋英悟様)	



コラボ・スクールは、ハタチ基金の支援団体のひとつです。ハタチ基金とは、東日本大震災の被災地の子どもたちに寄り添い、20 年間継続的に支援を行う基金です。
<http://www.hatachikikin.com/>

未来の復興リーダーを育てる、発展学習の機会にも

未来の復興を支える社会のリーダーを、そして 10 年後の日本にイノベーションを起こしてくれる人材を、東北の地から輩出することを、コラボ・スクールでは目指しています。子どもたちが自由に未来を思い描くキャリア学習、社会課題の解決に向けて一歩を踏み出すプロジェクト学習を行っています。

グローバル人材を育てる「Skype英会話」

震災後には、海外からの支援など子どもたちが「世界」を感じる機会も増えました。そこで、「もっと英語を身近に感じ、復興を担うグローバル人材に育ってほしい」という想いから、英会話の習得に重点を置いています。インターネットを通じたネイティブ講師との会話・外国人の方々の前でのスピーチ・交流プログラムなどを行いました。

外国の方との交流プログラムでスピーチをした生徒の感想より

今回のスピーチで私は英語が好きになりました。練習ではすごく緊張して泣いてしまったけど、コラボ・スクールの先生やバンクオブアメリカ・メリルリンチの方が大丈夫大丈夫と言ってくれてとても救われました。今回のスピーチはとても大きな一歩でした。



Skype 英会話の様子

音楽やスポーツなど、プロによる特別授業

コラボ・スクールでは、プロフェッショナルに活躍する大人との出会いを通じて様々な学びを取得する機会を設けています。これまでは天文学者、ゲームクリエイター、プロサッカー選手やジャズピアニストなどを講師に迎えました。多様な生き方や働き方を知ることによって、子どもたちが自由に未来を思い描くことの手助けをします。

ジャズピアニスト片倉真由子さんによる授業を受けた生徒の感想より

片倉さんの話を聞いて、心の中の霧が一気にはれ、「受験勉強を頑張ろう」と思えました。今度会うときは、ステージの上の片倉さんを見たいです。本当に今日はありがとうございました。



片倉さんによる授業後の集合写真

卒業生が上京して大人と触れ合う

「やくそく旅行」

2014 年 3 月卒業後に中学 3 年生 23 名が上京し、「やくそく旅行」を実施しました。ご支援いただいている企業などを訪問し、社会で活躍する大人たちとの出会いを通して「なりたい大人像」を考えることが目的です。最終日の生徒報告会では、「私たちの思う “ カッコいい大人 ”」についての班ごとの報告と、「20 歳の自分への手紙」を生徒の有志が発表しました。



訪問先の企業にて手作りの名刺でご挨拶

私たちの思う “ カッコいい大人 ” の発表より

“ 自分の中に太い柱を持っている人 ” です。会社は利益のことだけを考えているというイメージを持っていたのですが、今回のリーダーへのインタビューで「まず相手が幸せになることを目指している」ということを知りました。

「20 歳の自分への手紙」より

15 才の私には、夢があります。それは生物学者になること、そして誰かのために何かして達成感を得てそれを噛み締められる大人になることです。「どんな形であっても、人のためになることをする」ということを忘れないでください。



なりたい “ カッコいい大人像 ” 班ごとに発表



いつでも、なんでも挑戦できる中高生の秘密基地「b-lab」

2015年4月にオープンする東京都文京区の青少年プラザ「b-lab」(ビーラボ)をカタリバが運営することとなりました。「b-lab」は、いつでも、なんでも挑戦できる中高生専用の秘密基地です。学校とも塾とも違う、新しい放課後をつくっていきます。

東北で生まれた「放課後の居場所」を、東京へ

NPO カタリバでは、これまで出張授業「カタリ場」を通してたくさんの高校生の心に火を灯してきましたが、カタリ場にはそこで灯った火を継続的にフォローする機能がありませんでした。一方、被災地の放課後学校「コラボ・スクール」の運営を通して、地域に根ざして子どもたちの日常に伴走し、可能性を引き出す重要性を実感する中で、私たちが抱いたのは「コラボ・スクールが東京にあれば」という思いでした。

地域の教育力を高めたい、文京区と連携

「地域と中高生をつなげたい」カタリバがそう考えていた時に出会ったのが文京区でした。文京区では受験をして区外の学校へ進学する子どもも多いため、中学進学を境に地域と生徒が断絶してしまいます。一方で、他区から通学してくる中高生へのアプローチ方法がない。地域の教育力を高めたいけれどこれらの課題を抱えていた文京区とカタリバが、解決策として見出したのが、中高生が何かにチャレンジできる場所を作ることでした。



スタッフと高校生による打ち合わせ風景



中高生が発案したロゴ

【所在地】東京都文京区湯島4丁目7番10号 【最寄り駅】本郷三丁目・湯島

中高生が施設づくりから主体的に参加

「b-lab」のポイントは、中高生が施設を作る段階から参画することです。愛称である「b-lab」という名前を考えたのは文京区内の高校3年生。その他にもロゴ作り、空間デザイン、フリーペーパー発行など、b-lab 作りの様々な過程に中高生が主体的に携わっています。



空間デザインを考えるワークショップでの集合写真



b-lab は色んな人と自由に議論できる場所
私立高校 2年
大野 景信

僕は曾祖父から四代ずっと文京区に住んでいますが、区外の中学高校に通学しています。それでも少しでも文京区の事に関わりたいと思っていた時に見つけたのが、カタリバが立ち上げる秘密基地「b-lab」でした。秘密基地という言葉にとっても興味がわき、試みにワークショップに参加してみることにしました。そこは、部活、部活、部活で生きてきた僕にとって、はっきり言って衝撃的でした。学生や大人の人たちと、同じ目線で自由に議論できる場所なんて、それまで経験したことがありませんでした。部活や勉強との両立は大変ですが、自分も一員として立ち上げに関わっていきたいです。

※所属・学年は2014年当時のものです



高校生が、地域の課題に取り組む「マイプロジェクト」

高校生が自分で地域やコミュニティの課題を見つけ、解決するためのプロジェクトを進める、それが「マイプロジェクト」です。全国各地の地域課題を、教育機会へと変えていきます。

地方に山積する、新しい課題

少子高齢化や人口減少、福祉、医療、政治、教育…もちろん都市の問題も深刻ですが、地方もこれまで直面したことがない多くの課題を抱えています。都市が20年後に迎える、まだ解決の糸口が見つからない課題と向き合っていく必要があるのが、地方地域です。

地域課題は、教育機会として活用できる

コラボ・スクールでは「復興の担い手を育てる」という目的のもと、高校生が町のためにできることを考え取り組むプロジェクト型学習を実施しています。プロジェクトを通して分かったことは「地域課題が、教育機会になる」ということでした。そして、これは被災地だからではなく、その他の地域も同じなのではないか。地域課題の解決を通して高校生が一步を踏み出す、そのチャンスを全国に広げたいという思いで始まったのが「マイプロジェクト」です。



小学生たちと公園で遊ぶ企画を作る様子

全国でチャレンジが加速する環境づくりを

カタリバは、マイプロジェクトに取り組む高校生を応援し、プロジェクトに取り組みやくなるような環境を作りを行っています。2014年9月には、全国から73名の高校生が集い自分のマイプロジェクトを考える合宿研修「全国高校生 鎌倉カイギ」を行いました。また、日頃取り組んでいる自分たちのマイプロジェクトを発表する場として年に1回「全国高校生 MY PROJECT AWARD」を開催しています。



鎌倉カイギでマイプロジェクトを発表



自分が変わったのは、多くの人の支えがあったから
県立高校3年
吉田 優作

マイプロを始める前の自分は人の前で意見を話すことができず、常に人の後ろに回って行動していました。しかし、マイプロをはじめてから少しずつ自分の意見を話すことができるようになり、自分が先頭に立ってプロジェクトをもてるようになりました。自分が変わることができたのは、単にマイプロに参加することではなく、その中でできた仲間や、コラボ・スクールの皆さん、地域の方々の支えがあったからこそです。サポートしてくださった皆さんに感謝しています。

※所属・学年は2014年当時のものです

これまでの軌跡 これからの取り組み

カタリバが取り組む社会課題は、「子ども・若者の未来を生き抜く意欲や能力が、生まれ育った環境によって左右されてしまうこと」です。設立当初から続けてきたカタリ場事業、そして東北復興のため始まったコラボ・スクール。それぞれの事業に取り組むなか、予想外の課題に直面し、そして大きな可能性に出会ってきました。理念「生き抜く力を、子ども・若者へ」のもと、カタリバでは今、新しい事業が生み出されようとしています。

2001～

高校生の心に火を灯す授業 「カタリ場」を構想

カタリバの設立は、今から 10 年以上前に遡ります。「たまたま出会った環境や、受けられた教育によって、描き出せる未来のイメージさえも違ってしまうこと」当時大学生だった今村久美（代表理事）と三箇山優花（共同創業者）がこれに疑問を抱いたのが、創業のきっかけでした。

当初は学校で受け入れてもらえなかった授業も、スタッフの熱意と先生方の口コミで、首都圏の公立高校を中心に広まりました。2006 年には、NPO 法人化。ボランティアや寄付者、企業・行政などさまざまな方から応援いただき、2011 年までには累計で 4,500 人以上がかかわる活動へと成長しました。



カタリ場の授業の様子

2011～

被災地の放課後学校 「コラボ・スクール」を設立

2011 年 3 月、東日本大震災。その年の 7 月、コラボ・スクールを設立しました。現地のニーズに寄り添い、開校当初は学習支援と心のケアに注力しました。カタリ場で培ったノウハウをもとにキャリア学習等も取り入れ、未来の復興を担うリーダーの育成に取り組みしました。

学校の先生の「日常」的な教育活動と連携させたキャリア学習プログラムカタリ場授業は、生徒の心に火を灯す「非日常」の空間。生徒たちの「非日常」ではなく「日常」に寄り添ったのは、私たちにあってコラボ・スクールが初めての経験でした。震災を体験して、「学びたい」という意欲が高まった子どもたちに寄り添いました。



コラボ・スクールで学ぶ小学生たち

2014～

いつでも、なんでも挑戦できる中高生の 秘密基地「b-lab」が始動

震災後の 3 年間、カタリ場事業も静かに拡大が進みました。関西・北海道・長野などで手をあげた有志たちと協力して、連携拠点は 7 つに。課題だった収益化も、大学・専門学校や企業と連携して生まれたプログラムで、目処がつき始めました。設立から 14 年間で、18 万人の生徒にカタリ場を届けられました。

授業でたくさんの中高生と接するなかで感じてきたもどかしさは、生徒たちの日常を継続的にサポートするのが難しいことでした。先輩との対話をきっかけに、「私も何かやってみたい!」と心に火が灯った中高生が、仲間たちと学び行動を起こせる放課後の居場所をつくりたいという思いから、b-lab が東京都文京区に誕生しました。



これからの目標を発表する中学生

生まれ育った町の地域課題にチャレンジ 「マイプロジェクト」を全国に展開

コラボ・スクールで学び、「町の復興のために、自分たちも何かしたい!」「支援される側を卒業して、自分が大槌や社会をつくる人になりたい」と想いを抱く生徒たちが出てきました。震災後の町の課題を解決するため立ち上がった高校生が、行動しながら考える力やチームワークを培う、プロジェクト型学習を行いました。

「過疎」「高齢化」… 私たちが 3 年間に改めて気づいたのは、被災地が直面する課題は、全国の「地方」に共通すること。そして、ふるさとの課題解決のため、各地の高校生が同じように行動を始めていることでした。日本中の高校生から同志を募り、被災地で生まれた「マイプロジェクト」を全国に展開していきます。



大槌の星を見ながら星座や宇宙の話をするプロジェクトの様子

理念 「生き抜く力を、子ども・若者へ」

2012 年 10 月、東北復興事業の立上げおよび、教育に求められる環境変化に伴い、NPO カタリバは理念を再定義しました。私たちの新しい理念は、「生き抜く力を、子ども・若者へ」です。

「生き抜く力」とは？

自律

どんな環境にいても、「未来は自分自身で創り出せる」という期待感を持ち続けられる。自ら目標を定めて目の間の「やるべきこと」から、逃げずに向き合う。このように主体的にチャレンジしていく子ども・若者を、カタリバは育てます。

共生

周りを思いやり、「地域」や「社会」などコミュニティのため共に助け合う。他者による環境の改善を期待するのではなく、当事者として参加する。このように、「共助」のスタンスと「当事者意識」をもった子ども・若者をカタリバは育てます。

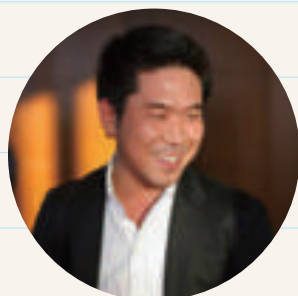
イノベーション

時代がどのように変化しても、自ら考え、課題を設定する。その解決に向けて、リーダーシップをとりながら変革を進めていく。このように、自らの「持ち場」で、新しい価値を産み出していける子ども・若者を、カタリバは育てます。

イノベーションとは未来の当たり前を創ること

岡本 拓也 常務理事・事務局長

カタリバは、現在、新たな創業期を迎えています。カタリ場事業は全国展開と事業展開を加速し、コラボ・スクールは女川町と大槌町にしっかりと根付いています。そして、職員数 60 名を超える組織となりました。事業・組織規模がともに 5 倍以上に成長したのはここ 3 年半でのことであり、その成長過程の中で重要な役割を果たしたのが、理念「生き抜く力を子ども・若者へ」でした。震災後に東北復興事業が始まる中で、あらためて我々は何を目指すのか、どんな存在なのか、どういう組織を目指すのか、を半年かけて、学生から外部の識者まで含めて対話しながら、理念を言語化しました。そのプロセス自体が組織を強くし、理念が言語化されたことで、より納得感を持って活動を展開できるようになりました。拡大することが必ずしも良いことではないけれど、世の中に価値を創りだしているからこそ、社会から求められ、共感と共に人が集まってくるのだと思います。”イノベーションとは未来の当たり前を創ること”そんなことを実感しています。10 年後、どんな価値を社会に、そして学校・教育現場に提供し、足跡を刻んでいくのか？今年はその礎を築く勝負の一年、真価が問われます。これからも、カタリバをよろしく願います！



さまざまなカタチで、評価いただきました

表彰の受賞やマスコミでの紹介など、たくさんの方に活動を知っていただき、評価の機会をいただきました。その一部をご紹介します。

表彰の受賞

2008.12 日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2009 キャリアクリエイイト部門
 2009.06 内閣府・男女共同参画「チャレンジ賞」
 2010.09 2010年度 クッドデザイン賞
 2012.02 パナソニック教育財団 2011年度“こころを育む活動”関東ブロック大賞
 2012.05 社会貢献支援財団「平成 24 年度 東日本大震災における貢献者表彰」
 2012.12 「いいね！ JAPAN ソーシャルアワード 2012」最優秀ソーシャルプロジェクト
 2014.02 朝日のびのび教育賞
 2014.03 地球倫理推進賞（国内活動部門）・文部科学大臣賞
 2014.04 日経ソーシャルイニシアチブ大賞「東北部門賞」



「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」での表彰式

行政との協力

2010.11～ 代表・今村が文部科学省「大学生の就業力育成支援事業委員会審査部会」に委員として参加
 2011.07～ 代表・今村が内閣府「子ども・若者育成支援推進点検・評価会議」へ委員として参加
 2012.02 女川町でのキャリア教育活動が、文部科学省による「復興教育支援事業」に採択
 2012.02 「参議院第三特別調査室 共生社会・地域活性化に関する調査会」に、代表・今村が事例発表
 2012.04～ 埼玉県で、「特定非営利活動法人 NPO カタリバを活用したキャリア教育実践研究校指定事業」に県内 5 校が指定



文部科学省での意見交換会で、代表理事今村が大臣・子どもたちとともに

メディアでの報道

新聞

2014.1.24 東京新聞（朝刊）「命守る 17 歳の誓い」
 2014.3.10 読売新聞（朝刊）「心のケアはこれから正念場だ」
 2014.5.2 日本教育新聞（朝刊）「被災地は今」
 2014.5.17 岩手日報（朝刊）「高校生 感謝のガイド」
 2014.6.8 河北新報（朝刊）「手踊り復活へ 挑戦諦めない」
 2014.6.19 産経新聞（朝刊）「踏み出す勇気学んだ」
 2014.9.24 朝日新聞（神奈川版）「学びの主権、子どもの手に」
 2014.10.31 北海道新聞（朝刊）「NPO が学習をサポート」

テレビ

2012.10.20 NHK E テレ「グラン・ジュテ～私が跳んだ日～」
 2012.12.30 TBS 系列「サンデーモーニング」
 2013.11.28 NHK 総合「震災ドキュメント 2013「高校生、“公園”をつくる」」
 2014.3.9 NHK E テレ「東北発未来塾」
 2014.4.7 NHK 総合「明日へ 1min」
 2014.10.30 RBC 琉球放送「THE NEWS」

雑誌

2012.8.2 ミセス（6月号）「輝くミセスたち」
 2012.5.14 プレジデント（6.4号）「部下から尊敬されるには、どうすればいいか」
 2012.8.2 オレンジページ（8月17日号）「復興支援、それぞれのカタチ」
 2014.2.7 事業構想（3月号）「事業の本質から新たな収益を発掘」
 2014.4.1 学研・進学情報（5月号）「大学生との対話から小さな目標を見つける」
 2014.4.26 TV Bros.（4月26日号）「ナナメの関係」
 2014.10.1 ソトコト（10月号）「対話を通して、パートナーになる。」
 2014.11.1 高 1 My Vision（11月号）「聞いてみよう。考えてみよう。夢って、なんだ」



※その他にも、多数のメディアにて放映・掲載をいただきました。

団体概要

名称 認定 NPO 法人カタリバ（認定特定非営利活動法人カタリバ）
 本部 東京都杉並区高円寺南 3-66-3 高円寺コモンズ 2F
 TEL 03-5327-5667 FAX：020-4665-3239
 設立 2001年11月1日（2006年 9月21日に法人格取得）
 役員 代表理事 今村久美 常務理事 岡本拓也
 理事 酒井穰、中原淳、井上英之
 監事 久保田克彦
 職員 57 名（2014 年 8 月現在）※学生インターン含んだ事務局スタッフは 95 名

組織図

カタリ場事業部と東北復興事業部2つの事業部門が教育活動を行い、広報・ファンドレイジング部と経営管理本部がこれらを支える基盤としてマーケティング・資金調達や財務・経理・人事などの業務を行っています。

役員会

代表理事

理事

監事

事務局

事務局長

カタリ場事業部

東北復興事業部

広報・ファンドレイジング部

経営管理本部

沿革

2001.11 任意団体「カタリバ」を設立
 2002.11 私立千葉敬愛学園高校の文化祭で「カタリバカフェ」を開催
 2004.10 高校での「カタリ場」の展開を本格的に開始
 2006.9 NPO 法人格を取得
 2007.4 東京都教育庁と、教育支援コーディネーター制度の業務委託契約を締結
 2007.9 青森県でカタリ場を実施 地域支援活動が始動
 2008.11 嘉悦大学にて、初年次教育プログラム導入
 2009.9 「TIME（アジア版・南太平洋版）」の表紙に掲載
 2010.9 東京都杉並区高円寺に事務所を移転
 2011.7 コラボ・スクール「女川向学館」を設立
 2011.12 コラボ・スクール「大槌臨学舎」を設立
 2012.10 理念「生き抜く力を、子ども・若者へ」を再定義して発表
 2013.5 東京都より認定 NPO 法人として認定